

大学コンソーシアム京都インターンシップ・プログラム
「長期プロジェクトコース」

有限責任事業組合まちとしごと総合研究所
「漆×〇〇でソーシャルグッドなコミュニティを生み出す」
田頭克浩 出原美里 三宅文太
2021年11月10日

1. はじめに
2. 有限責任事業組合まちとしごと総合研究所について
3. 株式会社堤浅吉漆店について
4. プロジェクトの概要
5. 活動報告
6. インターンシップで学んだこと
7. 最後に

1. はじめに

私たちは受け入れ先である有限責任事業組合まちとしごと総合研究所の「SDGs の観点からまちの活動団体さんの次の一步を応援・提案する支援プロジェクト」に参加した。

SDGs とは「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称で、2015 年 9 月に国連サミットの中で決められた誰ひとり取り残されることなく、人類が安定して地球で暮らし続けることができるための国際目標 (17 のゴールと 169 のターゲット) のことであり、近年活動が促進されている。

2. 有限責任事業組合まちとしごと総合研究所について

有限責任事業組合まちとしごと総合研究所は、伏見・下京・東山にある京都市いきいき市民活動センターを拠点に、地域の豊かな資源を生かした持続可能な地域社会づくりに取り組まれており、今回は下京と伏見の共同で実施する「大学生による SDGs×ローカル実践プロジェクト」の一環として約 5 か月の間私たちを受け入れていただいた。

3. 株式会社堤浅吉漆店について

株式会社堤浅吉漆店は、明治 42 年に創業された日本でも数少ない漆の精製を行う漆屋である。お店で扱っている漆は金閣寺や日光東照宮などの修復にも使われている。漆は塗料や接着剤として古来より活用されてきた。一旦硬化すると熱や湿気、酸、アルカリに強く、腐敗防止、防虫の効果もあるため、漆は食器や家具など木製品などを長持ちさせる優れた天然素材として親しまれてきた。しかし、現代では漆は一般的には高級品というイメージを持たれており、大量生産された安価な商品があふれているなかで、私たち若い世代にとっては身近なものだと感じられていないという課題がある。またそれに伴い、日本国内で生産される漆の量は減少している。現在国内で使用されている漆はほとんど輸入品であり、国産漆は全体の約 5% しかない。よって担い手の減少も避けられず、日本の伝統的な漆の文化や技術を次世代に繋げていくことの重要性が高まっているのである。

今回お世話になった株式会社堤浅吉漆店の堤卓也様は、「漆をもっと身近にしたい、漆をみんなの自分ごとにした」という想いを抱えており、本業である漆の精製をしながら、漆の魅力を伝えるためのさまざまな取り組みをされている。例えば、堤さんは安くて便利なものが溢れ、使い捨ては当たり前になっていることに疑問を感じ、「漆を通じてモノを大切にする心を育てほしい。」という思いから、子どもたちに循環可能な素材である漆の魅力を伝えるための「うるしのいっぽ」や、ご自身の趣味であるサーフボードや自転車などに漆を塗り、今までになかった漆の新しい可能性や価値観を生み出す「BEYOND TRADITION」など、漆を次世代につなぐために日々活動されている。また、堤卓也様は漆の普及だけでなく工芸を通じた地域や循環型社会の実現に向けて取り組まれていることも分かった。

4. プロジェクトの概要

私たち 3 名は、下京いきいき市民活動センターの吉田隆真様と株式会社堤浅吉漆店にご協力していただき、「漆×〇〇でソーシャルグッドなコミュニティを生み出す」という課題に取り組む。SDGs の観点を取り入れながら、今後どうすれば若い世代に漆のすばらしさを知ってもらえるのか、身近に感じてもらうのかを考え、私たちの考案する新たな取り組み

を株式会社堤浅吉漆店にご提案させていただくことになった。

5. 活動報告

私たちは、6月から11月までの約5カ月間にわたって、長期インターンシップの活動を行い、これまで活動してきた内容をここに報告する。

[6月]

6月から活動が始まり、京都市下京いきいき活動センターにてオリエンテーションを行い、支援対象団体として株式会社堤浅吉漆店に決定した。まず、私たちが取り組んだのは、株式会社堤浅吉漆店や漆について各自でリサーチした。株式会社堤浅吉漆店のウェブサイトや冊子、インターネットなどから漆産業の現状や課題を詳しく調べ、これから企画を進めるにあたって必要となる漆の知識を得た。

[7月]

7月のインターンの活動にて、株式会社堤浅吉漆店の堤卓也様と初めて顔を合わせ、お話を伺い、漆に対する想いや実際にどのような活動をしているのか知った。また、私たちがリサーチした漆についてのプレゼンテーションを行った。ここで、「漆×〇〇でソーシャルグッドなコミュニティを生み出す」というテーマが決定し、企画考案の活動に入る。

7月中旬に株式会社堤浅吉漆店へ訪問し、工場内の見学や堤様から貴重なお話を聞かせていただいた。サーフィンや自転車、鉄など様々な素材に塗られた漆を実際に見て触れることができた。工場見学を通して、堤卓也様の想いに共感し、改めて漆の魅力に気付けた貴重な時間となった。

[8月]

8月のインターン活動では、私たちの想いをカタチにするためにヒコーキモデルに沿って企画作りを行い、企画の立て方について学んだ。

夏休み期間が入ってから、毎週オンラインにて会議を行うことを決定した。オンライン会議の内容として、企画シートの作成する作業に取り掛かり、様々な意見やアイデアを出し合った。その中で企画を立てるにあたり、株式会社堤浅吉漆店の「ふきうるしセット」を購入し、実際に漆に触れてみようと考えた。箸の木地に生漆を摺り込み、拭き上げる作業を何度も繰り返す作業を行った。この漆塗りの体験を活かし、さらに企画の詳細を詰めた。そして、モノを大切に使うことの重要性に気付き、私たちは「漆×〇〇でソーシャルグッドなコミュニティを生み出す」の〇〇の部分のリメイクに決定した。思い出に残る品などを親子で漆塗りの体験ができるイベントを企画した。

[9月]

親子で漆塗りをする体験イベントの企画案を堤卓也様に提案したところ、漆職人の人件費や子供の安全面など考えなければならない点が多くあった。また、堤卓也様と私たちの都合が合わず、私たちでイベントを実現させることは厳しいものとなった。この結果、私たちが企画するイベントを株式会社堤浅吉漆店に提案するという形となり、さらに企画案を練

り直した。漆塗りをする製品を木製に絞り、形状が複雑でないものにした。例えば、積み木やけん玉である。さらに、漆の汎用性を多くの方に知っていただくために、実際に漆塗りのリメイク動画制作を企画した。リメイク動画を参考にして、自分の所持品に漆を塗り、リメイクができる。私たちは、親子で漆を塗る体験とリメイク動画の2つの企画を提案した。これらの企画を通して、漆と関わる機会を創出し、また漆塗りに興味を持っていただきたいと考えた。

[10月]

京都市下京いきいき活動センターでのインターンシップ最終活動は、FacebookにてLive配信を行い、企画提案会を実施した。約4カ月かけて、「漆×〇〇でソーシャルグッドなコミュニティを生み出す」のテーマに基づき活動してきた最終成果を発表し、企画案や活動内容を共有した。

6. インターンシップで学んだこと

インターンシップの活動の過程・活動をやり遂げることで学べたことは、4つある。一つ目、SDGsについて学べたこと。二つ目、プロジェクトを企画していくうえで、困難なことがあったときにあきらめずに考えぬく大切さ。三つ目、他のチームの発表から刺激を受けられたこと。4つ目インターンを通して、新しいアイデアを生み出す力が身に付けられたこと。

【SDGsについて学べたこと】

SDGsとは「Sustainable Development Goals」の略称であり、和訳すると「持続可能な開発目標」とされている。国連サミットの中で決められた誰ひとり取り残されることなく、人類が安定して地球で暮らし続けることができるための国際目標のことを指す。発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサルなものとして位置づけられている。SDGsは2030年までに持続可能でよりよい世界を目指している国際的な目標だ。国連サミットでは加盟国の全会一致で採択されている。このことから、世界の中で最も関心度が高いことの1つといえるだろう。インターンシップに参加するまでは、SDGsに関心を持っていたが、行動には移せるまでは至っていなかった。しかし、本インターンシップに参加することで、SDGsのテーマである「つくる責任、つかう責任」という取り組みに参加できることができた。資源は無限ではなく、いつかは枯渇してしまう。普段の生活の中でも意識をもって行動できる契機に、インターンシップはなったと感じている。

【プロジェクトを企画していくうえで、困難なことがあったときにあきらめずに考えぬく大切】

漆×〇〇という大きなテーマを与えられた。「漆×〇〇でソーシャルグッドなコミュニティを生み出す」というテーマが与えられた。チーム内では、〇〇の部分を決めるために会議をしたが思うように決まらなかった。たとえ、〇〇に入れる商品を思いついていたとしても、検索すればヒットし、既に存在しているものばかりだった。プロジェクトが停滞していたころ、実際に株式会社堤浅吉漆店が販売している漆を簡単に塗れるキットを購入し、自分たちで漆を塗るという体験をした。そのことで、停滞していた状況を打開することができた。諦

めて、安易なものにすることもできたと振り返れば思う。しかしながら、自分たちで体験することで、ゆっくりではあるものの前へ進むことができた。

【他のチームの発表から刺激を受けられたこと】

京都コンソーシアムの長期インターンシッププロジェクトでは、他のチームもあり、定期的に他のチームの進捗や活動内容を知ることができた。そこで、工夫している点や反面教師的に勉強できたこともあった。定期的に他のチームとかかわることで自分たちだけでなく、他のチームがいることを実感できた。同時に、よりよいものを発表したいという気持ちを芽生えるきっかけにもなっていた。切磋琢磨ができる環境が整っていたからこそ、刺激を受けてやる気になれた。しかし、刺激を受けずに取り組まないといけない状況が訪れる。その時は、この長期インターンシッププロジェクトを思い出し、自ら刺激を探しにいこうと思う。学生の段階で1つの解決策を見つけることができた。

7. 最後に

私たちは約5か月間のインターンシップを経て、様々なこと学んだ。この経験をこれからは活かせるよう精進していきたい。また、今回のインターンシップでお世話になった大学コンソーシアム京都インターンシップの方々やコーディネーターを担当していただいた深川先生、受け入れ先である有限責任事業組合まちとしごと総合研究所と株式会社堤浅吉漆店に感謝の気持ちを述べる。